

戊戌塙作碑釈文の再検討

Reexamination of the Script of the Ojak Inscription
HASHIMOTO Shigeru

橋本 繁

はじめに

戊戌塙作碑は、高さ一〇三センチ、幅六五センチ、厚さ一二センチほどの自然石に、九行にわたり文字が刻まれている。一九四六年に大邱市大安洞の民家で偶然発見され、朝鮮戦争時に一時行方不明になるが、一九五七年に再発見された。⁽¹⁾ 現在は、慶北大学校博物館に所蔵されている。六世紀の新羅金石文のなかでは、比較的早い時期に発見されたが、さほど注目されてきたとは言い難い。

これまでの研究について簡単に整理する。

建立年代については、碑文冒頭に「戊戌年」と書かれていて、一般的には五七八年とされているが、六三八年の可能性も排除されない。

「塙」の性格について、当初は漢字義によって軍事的用途のものである可能性が高いとされた。⁽²⁾ しかし、一九六八年に永川菁堤碑が発見されると、丙辰銘で貯水池の堤防のことを「塙」と呼んでいることから、⁽³⁾ 本碑も同様に考えられるようになった。ただし、菁堤碑が、本来設置され

た場所と考えられる貯水池のすぐ近くで発見されたのに対して、本碑発見場所は太邱の市街地であり、周辺に貯水池は存在しない。そのため、溪谷を塞ぐ貯水池ではなく、河川周辺に築いた堤防であり、河川の流量を調節して灌漑用水を供給する水利施設であるとする説もある。⁽⁴⁾

次に、碑文にみえる力役動員についてみていく。菁堤碑や明活山城碑、南山新城碑など、同時代の力役動員に関する碑文と比較すると、王京から派遣された地方官がみられず、代わりに僧侶である都唯那がみえることが特徴である。この点については、様々な理解が示されている。

石上英一は、中央僧官たる都唯那がみられることについては不明として、「塙によって水利上の利益を受ける地域の村落首長による労働編成」であり、「村落首長層の徭役労働徴発権により徴発されたもの」とする。⁽⁵⁾ 田中俊明は、都唯那が発案者であり、その説得に村民が応じたもので、やはり国家的な力役ではなく一地域の共同事業とする。⁽⁶⁾ 李宇泰は、国家の計画によるものではなく、地方民自らの必要によるものか、都唯那が所属する寺院が主管したものとする。⁽⁷⁾ 盧重国は、僧俗が結縁した香徒組

織が、共同労働により水利施設を作ったものとする。⁽⁸⁾ 朱甫暉は、香徒説について批判を加えた上で、僧職をもつ王京出身の僧侶がみられることと、その指揮のもとで在地勢力が動員されていることから、「王京に所在した国家的な寺院に与えられた祿邑」と関連づけた。⁽⁹⁾

塙造営の背景について碑本文には記されていないので、碑に登場する人々から明らかにするしかない。しかし、その検討は十分になされているといたいのが現状である。

こうした中で、近年、河日植氏が、碑文の再判読を行なっている。⁽¹⁰⁾ 判読では、「文字一つ一つを水性粘土で写し取って撮影して、これを反転して凹凸を逆にした状態」の写真を利用したという。これによって、論者によって判読の異なっていた文字が確定されるとともに、これまで疑われなかった読みが訂正されるなど、画期的な成果となっている。

筆者は、二〇一一年一〇月から一月に行なわれた「文字、その後韓国古代文字展」における国立歴史民俗博物館の共同調査に参加し、本碑を実見する機会をえた。⁽¹¹⁾ 調査に当たっては、様々な角度からライトを照らして、碑面の傷であるのか、あるいは字画であるかの判断を行なった。拓本では見分けにくい箇所も、この方法により判読が可能であった。

また、二〇一三年九月七日、慶北大学校博物館の展示室において、三上喜孝氏とともに再度調査した。⁽¹²⁾ これらの調査の結果、歴名の理解に関わるいくつかの文字について、さらに修正を加えることができた。

本稿では、碑文の釈文について再検討をおこなうとともに、新たな釈文に基づいて、内容について若干の検討を加える。

以下の釈文の検討においては、これまでに発表された様々な釈文について一々言及することは煩雑になるため、特別な場合を除いては、従来の釈文を代表するものとして韓国古代社会研究所編『訳註韓国古代金石文』所載のものを掲げ、これを「旧釈」と呼称し、⁽¹³⁾ 先述した河日植の釈文については、これを「新釈」と呼ぶ。

一、釈文の検討

まず、試釈および歴名表を掲げる。比較のために、旧釈と新釈を次頁に掲げた。なお、歴名表の官位等の欄の丸数字は、外位の等級を表す。

○戊戌塙作碑釈文試案

- 510152025
- ①戊戌年十一月朔廿四日另冬里村員□塙作記之此成在
- ②人者都唯那寶藏□□都唯那慧藏阿尼
- ③大工尺仇利支村壹利刀兮貴干支上□豆尔利□
(兮カ干カ)
- ④道尺辱生之□村□夫作村筆令一伐奈生一伐
- ⑤居千村代丁一伐另冬里村沙等乙一伐珍得所利村也温失利一伐
- ⑥烏珍叱只村□□一尺小工尺另所兮一伐伊叱等利一尺
- ⑦伊助只替此塙大廣廿步高五步四尺長五十步此作
- ⑧起數者三百十二人功夫如十三日了作事之
- ⑨文人壹利兮一尺

歴名表

⑮	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①		
文人			小工尺							道尺		大工尺	都唯那	都唯那	役職名	
				烏珍叱只村	珍得所利村	另冬里村	居千村	夫作村	辱生之□村		仇利支村		寶藏	慧藏	出身地	
壹利兮	伊助只	伊叱等利	另所兮	□□□	也温失利	沙等乙	代丁	奈生	筆令	□□	上□豆尔利□ (兮カ干カ)	壹利刀兮			人名	
一尺⑨	彼目⑩	一尺⑨	一伐⑧	一尺⑨	一伐⑧	一伐⑧	一伐⑧	一伐⑧	一伐⑧			貴干支④	阿尼	□□□	官位等	

○旧釈（『訃註韓國古代金石文』）	
① 戊戌年十二月朔十四日另冬里村高□塙作記之此成在□	5
② 人者都唯那寶藏阿尺干都唯那慧藏阿尺干	10
③ 大工尺仇利支村壹利力兮貴干支□上□壹□利干	15
④ 道尺辰□生之□□村□夫作村笔令一伐奈生一伐	20
⑤ 居毛村代丁一伐另冬里村沙木乙一伐珍得所利村也得失利一伐	25
⑥ 塙珍此只村□□一尺□□一尺另所□一伐伊此木利一尺	
⑦ □助只彼日此塙大廣廿步高五步四尺長五十步此作	
⑧ 起數者三百十二人功夫如十三日了作事之	
⑨ 文作人壹利兮一尺	
○新釈（河日植）	
① 戊戌年十二月朔十四日另冬里村員□塙作記之此成在□	5
② 人者都唯那寶藏？尺干都唯那慧藏阿尼□	10
③ 大工尺仇利支村壹利刀兮貴干支□上□豆□利干	15
④ 道尺辰□生之□□村□夫化村毛令一伐奈主一伐	20
⑤ 居毛村代丁一伐另冬里村沙木乙一伐珍得所利村也得失利一伐	25
⑥ 烏珍叱只村□□一尺□□一尺另所兮一伐伊叱ホ利一尺	
⑦ 伊助只彼日此塙大廣廿步高五步四尺長五十步此□	
⑧ 起數者三百十二人功夫如十三日了作事之	
⑨ 文作人壹利兮一尺	

次に、行ごとに問題となる釈文について検討する。なお、碑文の文字を表わす際に、七行目一二文字目を「⑦12」のように表現する。

（1）一行目

碑文の建てられた日付に関して、四字目は当初、「四」と読まれてきたが、旧釈により一字分に書かれた「十一」とされた。字画から、こちらが正しいと思われる。なお、このような合字は、周知のように新羅碑文ではよくみられるもので、同じ「十一」の例としては明活山城碑がある。また、七字目は、従来「十」とされてきた。しかし、縦画が二本確認されるため、「廿」とする⁽¹⁴⁾。したがって、日付は二月二十四日となる。農閑期であり、力役動員の時期としてふさわしいだろう。

次に、一四〇一六字目はこの塙の名称であり、旧釈では「高□塙」と読む。しかし、新釈が指摘するように、⑦12「高」とは字形が大きく異なるため「高」とは読みがたい。字画は、「且只」を一字格につめたようにみえる。新釈は何の文字かは不明としているが、無理に一字とみる必要はなく、上記の「十一」と同様に二字を一字分に書いたものとみられる。したがって、塙の名は「且只□塙」となる。

図1 ①13~16
「村員□塙」

二三字目「在」は、字画の下部が一部欠損している。旧釈・新釈ともに、この下にさらに文字があったとして「□」を入れるが、確証はない

ため試釈には示さなかった。なお、「在」は、時間の完了や持続を表わす時相の表現に使用される吏読であり、「此成在□人者」で「これを成した□人」は」という意味であるという⁽¹⁵⁾。末尾に欠損字がないと仮定しても、「これを成した人」となり、意味は通じることになる。

(2) 二行目

三字目以降は、従来「都唯那・寶藏・阿尺干、都唯那・慧藏・阿尺干」と解釈されてきた。都唯那は中央の僧官であり、阿尺干は第六等の京位であるため、この時期の新羅では、僧も官位をもっていたと理解されてきた。このことが、この碑文の性格を理解する重要な根拠ともされてきたことは、「はじめに」で述べたとおりである。しかし、一五・一六字は、新釈が指摘するように、「阿尼」と読むべきである。阿尼は尼のことで、『三国史記』職官志に「阿尼典母六人」「都唯那娘一人阿尼」などの記事がある。また、金石文では、公州・舟尾寺址出土碑（新羅、年代未詳）に、「阿尼仁娘生」「阿尼正奴子生」などとある⁽¹⁶⁾。

さらに、一人目の「寶藏」に続く八・一〇字について、新釈は、「尺干」と読んで京位第六等「沙尺干」の可能性があると指摘する。その上で、僧侶が京位をもっているという事実は、当時、僧俗の境がさほど明確ではなかったことを意味するとしている⁽¹⁷⁾のだが、この箇所は、碑石の段差部分にあたっているため、釈読は非常に困難である。直接碑文にあたって確認できたのは、八字目では「シ」のような字画、九字目では右はらい、一〇字目では二本の横画のみであった。内容的にも、京位ではなく、一五・一六字の「阿尼」に相当する語句であった可能性も想定できる。このころの僧が官位をもったか否かは、この碑文そのものの理解にも関わるだけでなく、新羅仏教の性格を考える上でも重要な問題であり、慎重である必要がある。本稿では未釈字としておきたい。

(3) 三行目

一五字目以降について、従来は、「□上□壹□利干」と読まれ、「□上□（職名）壹□利（人名）干（外位）」などとされてきた。しかし、「貴干支」と「上」の間には、文字は確認されない。一七字目は「壹」と読まれてきたが、新釈の指摘する通り、字画の上部は存在しないため「豆」と読むべきである。一八字目は「尔」と読みうる。二〇字目は、従来、「干」と「兮」という二つの読みが示されてきた。碑面では、横画二本と縦画が確認できるが、どちらとは確定できなかった。

図2 ② 7~11
「藏□□□都」

図3 ③ 15~20
「上□豆尔利□」

新羅の官位の書き方に関して、六世紀前半に「干支」だったものが、五六一年の昌寧碑までに「干」に変化することが明らかになっている⁽¹⁸⁾。ところが、本碑には「貴干支」とあり、五七八もしくは六三八年という年代推定と矛盾する。これは、本碑が地方で作られたものである

ため、古い表記法が残ったと考えられよう。また、そうであれば、本碑の「戊戌年」は、通説通り五七八年の可能性が高いであろう。

(4) 四行目

三～七字目を、旧釈と新釈はいずれも「辰□生之□□」と六字でとる。しかし、「辰□」は「辱」の一字であり、画数が多いために字が大きくなっているものとみられる。七字目が「村」と釈されるため、「辱生之□村」という村名になる。四字の村名は、後述する玆得所利村、烏玆叱只村も同様である。

図4 ④3～7
「辱生之□村」

ただし、そのようにみた場合、道尺の役職名をもつ人物の冒頭に、外位を持たない唯一の人物がきていることになる。そうした事例は、浦項中城里碑にもみられるが、それは、官位よりも出身地を優先した六世紀初頭特有の書き方だからであり、鳳坪碑以降の碑文は、同一の役職名のなかでは、官位が優先される書き方へと変化している。⁽²⁰⁾あるいは、本碑は地方で作られたために、必ずしもそうした記載様式が貫徹されていなかったという理解も可能であろう。

一三字目「筆」は、旧釈は「芑」と読んでいたものを、新釈は草冠にみえるのは碑面の傷であるとして、「毛」と釈した。しかし、冠の部分は、明確ではないが横画二本が認められるので、「筆」と釈した。竹冠に毛と書く字形は、北斉の雋脩羅碑や房周陀墓誌(五六五年)にみられる。⁽²¹⁾

(5) 五行目

二字目は旧釈、新釈ともに「毛」と釈するが、「毛」に点の付いた文字とみてよいだろう。⁽²²⁾

図5 上・④13
中・房周陀墓誌
下・雋脩羅碑

図6 ⑤1～3
「居毛村」

一三字目は、旧釈では「木」としていたが、字形は新釈のいうように「ホ」である。新釈は、「等」の俗字である可能性を指摘しながら、「木」をこのように書く場合もあるため判断を保留しているが、「等」とみてよいのではないか。⑥21も同じ字形である。

(6) 六行目

一字目を旧釈は「塙」と読んでいたが、新釈が指摘するように「土」の部分は字画ではないと判断されるため、「烏」と読む。

一～一三字目については、旧釈・新釈ともに「□□一尺」と読んで、「人名+一尺(外位)」と解釈してきた。しかし、そのように解釈した場

合、この人物および前の人物が外位第九等である一尺であるのに対して、次の人物が第八等の一伐をもつことになってしまふ。同じ役職名かつ同じ出身地にも関わらず官位の順序が逆転するというのは、新羅碑における歴名方法と矛盾することになる。⁽²³⁾

この部分は、「小工尺」という役職名に釈すべきと考える。

図7 ⑥11~13「小工尺」
(上・拓本, 下・写真)

まず、「小」については、彫りが浅いながらも、縦画と左右のはらいが確認できる。左のはらいが二本あるようにみえるが、上のはらいは刻線ではなく、碑面の傷であると判断される。

また、「工」については、第二画を途中で折り曲げて書く字形と考えられる。中古新羅の碑文では、このような字形がよくみられる。

図8 中国の碑文に⁽²⁴⁾
みえる「工」字の例

本碑三行目冒頭の「大工尺」の「工」も、この字形とみられる。

図9 上・南山新城第二碑「工尺」
下・雁鴨池出土碑「大工尺」

図10 ③1~3「大工尺」
(上・拓本, 下・写真)

ここに「小工尺」という役職名が入ることで、⑪と⑫の人物で一尺から一伐へと外位等級の逆転することが自然に理解できる。また、小工尺の三人にはいずれも出身地が記されていないが、同時代の新羅碑文でこのように役・職名が変わっても出身地が記されていない場合は、直前に出てくる地名が出身地であると判断される。⁽²⁵⁾したがって、道尺の最後の人物の「烏珍叱只村」が出身地であると考えられる。

三・二〇字目は、旧釈ではいずれも「此」とされてきたが、新釈が他の「此」字と比較して「叱」としている。字形から妥当と判断される。

(7) 七行目

一字目は新積が新たに積読したとおり「伊」で正しいと思われる。
八・九行目については、特に修正点はない。

二・考察

積文の訂正に基づいて、内容理解についていくつか考察を加える。

まず、都唯那は、従来言われていたように京位を帯びていたとはいえないことが分かった。したがって、必ずしも中央の僧官とは限らず、大邱に存在した寺院の僧職であった可能性も想定するべきではないか。はじめに述べた、田中俊明や李宇泰のような理解が適当ではないかと思われる。

役職名として、新たに「小工尺」を積読した。その結果、本碑にみえる役職名は、「大工尺」「道尺」「小工尺」の三種であることが新たに明らかになった。

それぞれの役職名が、塙を作るにあたりどのような作業を担当したかについての従来の説をみると、大工尺は、この塙の築造と関連して作業全体に責任を持ち、南山新城碑の匠尺、工尺と同様の性格とされる⁽²⁶⁾。あるいは、「大工人」は工事の監督者であり、「道尺」は（中略）「技術指導者」とみられる⁽²⁷⁾ともされる。

これら三つの役職名のうち、「大工尺」のみ他の碑文でも確認できる。すなわち、雁鴨池出土明活山城碑に「大工尺」がみられるのである。明活山城碑の段階では、郡を単位に力役を動員していたと解釈されるため、「大工尺」は、郡レベルの工事責任者だったのではないかと思われる。本碑の大工尺の人物は、第四等の貴干支というとても高い外位をもっている。他の村の人物が、第八等の一伐が最高位であることと比べると、隔絶した地位にあるといえよう。したがって、仇利支村はこの地域の中心的な村であり、他の村を指導する立場にあったと考えられよう。

それに対して「小工尺」は、この郡レベルの大工尺と対比して捉えることができよう。南山新城碑においては、郡レベルの匠尺・工尺と、城・村レベルの工尺が必ず対応している。本碑の大工尺と小工尺も、これと類似した関係にある可能性が考えられ、小工尺は村レベルの責任者であった可能性が考えられる。

そして、小工尺の特徴は、三人とも同じ烏玠叱只村の出身者であるという点である。さらに、碑文にみえる同村の出身者は、道尺一人、文作人一人を合わせて計五人と拔きんで多い。碑文に三十二人が三日間の工事で作成したとあるが、主に動員されたのは、小工尺の出身地である烏玠叱只村と考えるべきではないだろうか。

残る道尺については、他の碑文にまったくみられないため、名称から性格を推測するほかない。

六世紀の新羅碑文にみえる役職名は、基本的に漢字義に基づいているものと考えられるため、「道」からいくつかの可能性を提示したい。まず、「道」をごく単純に「道路」と捉えれば、新羅の官道を管理する在地の官職という可能性が想定できる。また、塙が水利施設であるとすれば、各村への用水路建設に関わるという可能性もある⁽²⁸⁾。

さて、本碑の村について筆者は、地方制度としての村と考えている。これに対して、朱甫皦は、塙作碑にみえる村が行政村であることを否定し、自然村であるとみているので、検討を加えたい⁽²⁹⁾。

朱甫皦が根拠として挙げているのは、次の二点である。

第一に、在地勢力の外位が低いことである。本碑には少なくとも六・七の村名がみられ、これらの村がもし行政村だとするならば、南山新城碑にみえる一つの郡の村数よりも多い。にもかかわらず、外位が南山新城碑に比べて低い。

第二に、塙の築造には、所在する另冬里村の出身者が主に動員されたはずであるが、その村の外位所持者が一人しかみえず、それも一伐とい

う低い外位である。

まず、一点目の外位の低さについてみていく。確かに「干」(外位
一一等級の第一―七等に相当)という官位を持つ人物の数を比較すると、
南山新城碑では一つの郡で三―四人いるのに対し、本碑では一もしくは
二人しかみられない。しかし、南山新城碑と本碑では、そもそも性格が
異なる。南山新城碑は、王京を守るための山城を築く国家的な事業であ
り、道使・邏頭など中央から派遣された地方官も関わって全国から動員
されている。それに対して本碑は、一地域に「塙」を築くためのもので
あり、地方官はみられず、その代わりに僧侶が関わっている。外位が低
いのは、こうした動員体制の違いに由来するものである可能性は十分に
考えられよう。

次に、二点目の塙の所在地である另冬里村の人物が一人しかみられな
い点である。同じような疑問は他にも指摘されている⁽³⁰⁾。しかし、「塙」
の性格が何であれ、所在地の人々が力役動員を担うとは限らないのでは
ないか。例えば、施設の所在地と、それによって利益を得る地域とが必
ずしも同一であるとは限らない。そうであれば、さほど疑問とするほど
のことはないのではないか。

以上のことから、本碑の村は、いわゆる自然村ではなく地方制度とし
ての村という可能性も十分あると考えられる。

ただし、大工尺、小工尺がそれぞれ郡と村レベルの責任者だからといっ
て、本碑の力役動員が郡を単位として動員されたものとは限らない。塙
の造営を二人の都唯那が主導したものであるとすれば、塙の恩恵を受け
る広い地域の人々が築いているという可能性も考えられる。

おわりに

本稿では、釈文を修正した上で、次のことを指摘した。

①都唯那が京位をもっている確証はない。したがって、本碑にみえる

塙の建設を、王京の寺院と結びつける必然性はない。大邱地方の寺院が
主導した可能性も想定できる。

②役職名として、新たに「小工尺」を釈した。その結果、役職名が「大
工尺」「道尺」「小工尺」からなっていることを明らかにした。大工尺は
郡レベルの責任者、小工尺は村レベルの責任者で、力役を負担したのは、
主に小工尺の出身地である烏珍叱只村であった可能性を想定した。

考察では、推測に頼った箇所が多く、更なる検討が必要である。今後、
同時代の金石文、特に青堤碑との比較により、新羅の地方社会の実態を
解明していきたい。

註

- (1) 任昌淳「戊戌塙作碑小考」(『史学研究』一、一九五八年)。
- (2) 任昌淳「戊戌塙作碑小考」(前掲誌)。
- (3) 李基白「永川青堤碑貞元修治記の考察」(『永川青堤碑の丙辰築堤記』(『新羅政
治社会史研究』一潮閣、一九七四年。邦訳は、武田幸男監訳『新羅政治社会史研究』
学生社、一九八二年)。
- (4) 金在弘「新羅中古期村制の成立と地方社会構造」(『ソウル大学校大学院国史学
科博士学位論文、二〇〇一年』一五五―一五六頁)。
- (5) 石上英一「古代における日本の税制と新羅の税制」(『朝鮮史研究会編『古代朝
鮮と日本』龍溪書舎、一九七四年)二二三頁。
- (6) 田中俊明「新羅の金石文 戊戌塙作碑」(『韓国文化』四〇、一九八三年)一二頁。
- (7) 李宇泰「新羅の水利技術」(『新羅文化祭学術発表会論文集』一三、一九九二年)
四五頁。
- (8) 盧重国『百濟政治史研究』(一潮閣、一九八八年 二九八―三〇〇頁)。
- (9) 朱甫瞰「郡司・(城)村司の運営と地方民の身分構造」(『新羅地方統治体制の
整備過程と村落』新書苑、一九九八年)二二九―二三〇頁。後述する河日植も
同様に理解する。
- (10) 河日植「戊戌塙作碑追加調査および判読校訂」(『木簡と文字』三、二〇〇九年)。
- (11) 本稿で掲げる釈文は、調査参加者が共同で行なったものに基づいており、判読
結果については、二〇一二年三月の歴博の共同研究会において報告を行なった。
ただし、その後の追加調査で訂正した箇所もある。なお、この共同調査におけ
る成果の一部を、すでに、橋本繁「中古新羅築城碑の研究」(『韓国朝鮮文化研究』

- (11) 二二、二〇一三年）として発表している。
- (12) 碑文調査に際しては、慶北大学校博物館の李在煥氏に便宜を図っていた。記して感謝したい。
なお、再調査の成果を踏まえて、二〇一三年九月二二～一四日の新羅史研究会合宿において報告を行ない、貴重なご意見をいただいた。謝意を表したい。
- (13) 朱甫墩「一一・大邱戊戌場作碑」(韓国古代社会研究会編『訳註韓国古代金石文Ⅱ(新羅1・加耶篇) 駕洛国史蹟開発研究院、一九九二年) 九七～一〇二頁。
- (14) 国立中央博物館特別展図録『文字、その後 韓国古代文字展』(国立中央博物館特、二〇一一年) 六〇頁の写真には、明瞭に二本の縦画がみえる。なお、南豊鉉「V・戊戌場作碑銘」(『史読研究』太学社、二〇〇〇年) 一四一頁も「廿ともみえる」とするが、任氏に従って「十」と積している。
- (15) 南豊鉉「V・戊戌場作碑銘」(前掲書) 一四四頁。
- (16) 公州大学校博物館『舟尾寺址』(公州大学校博物館・忠清南道公州市、一九九九年) 一八二～一八三。なお、本資料は、国立中央博物館・李炳鎬氏から資料の提供を受けた。記して謝意を表したい。
- (17) 河日植「戊戌場作碑追加調査および判読校訂」(前掲誌) 一五四頁。
- (18) 武田幸男「金石文資料からみた新羅官位制」(『江上波夫教授古稀記念論集 歴史篇』山川出版社、一九七七年)。
- (19) 拙稿「浦項中城里碑の研究」(『朝鮮学報』二二〇、二〇一一年)。
- (20) 武田幸男「新羅六部とその展開」(『朝鮮史研究会論文集』二八、一九九一年)。
- (21) 雋脩羅碑は『大書源』(二玄社、二〇〇七年)、房周陀墓誌は京都大学21世紀COE「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」のデータベース (<http://coe21.zihunkyoto-u.ac.jp/dyuchar>) による。
- (22) 黄寿永も、すでにそのように積している(『韓国金石遺文』一志社、一九七六年)。
- (23) 朱甫墩「一一・大邱戊戌場作碑」(前掲書) 一〇一頁註一四は、「人名記載の順序上、同一の職名であったり、同一の地域出身である場合、高い官等から記載するという一般的な慣例に背いている。これは、記録上の錯誤であるようだ」と指摘している。
- (24) 『大書源』(前掲) 八五一頁。
- (25) 例えば、中城里碑末尾の使人と典書の人物には出身地名が書かれていないが、直前の作民沙干支と同じ牟旦伐喙の出身であると推定される(拙稿「浦項中城里碑の研究」前掲誌、五六頁)。
- (26) 朱甫墩「一一・大邱戊戌場作碑」(前掲書) 九七～一〇二頁。
- (27) 田中俊明「新羅の金石文 戊戌場作碑」(前掲誌) 一二頁。
- (28) 武田幸男氏のご教示による。
- (29) 朱甫墩「郡司・(城)村司の運営と地方民の身分構造」(前掲書) 二二二頁。
- (30) 田中俊明「新羅の金石文 戊戌場作碑」(前掲誌) 一二頁。
(早稲田大学非常勤講師、国立歴史民俗博物館研究協力者)
(二〇一四年一月七日受付、二〇一四年五月二六日審査終了)